

はぴとび 気づきのレポート

人生、いつも「今が出发点」
作家 志茂田 景樹さん

皆様、こんにちは。今月は、作家・タレントとして活躍されている、志茂田景樹さんのお話をご紹介します。三十六歳で作家デビュー、メディアなどで広く活躍されている志茂田さん。最近では、童話や絵本執筆も手掛け、全国で読み聞かせの活動を行われています。



心の床に引いたラインを越えてみよう

三年前にツイッターを始めました。百四十字以内の小窓に、はじめはイベントの告知などをしていました。そのうちに自分が漠然と考えていることを呟き始めたら、共感や感想のリプライ（返信）が殺到するようになりました。今では二十三人を超え、フォロワー（呟きを追う人）がいます。そこで感じるのは、今の若い人は心の床にラインを引いてしまっているようです。傷つきたくないので自分で線

を引いて、そこから踏み出さない。ゾウの寓話と同じ状態です。小さいときに鎖につながれたゾウは、大きくなり力が付いたので、鎖を引きちぎって歩けるのに、そこにとどまっている。鎖が切れるはずがないと勝手に思いこんで、行動を起こさない。それと似ています。

だから、まず一歩前に踏み出したらい。ラインを越えてみれば、不安や怖れが取り越し苦労だとわかります。もし傷ついたとしても、その経験が自分を強くしてくれます。



コンプレックスなんて無意味

五歳のときぼくは耳を悪くして、音感が養えずにオンチになりました。そうでない人にはとても想像できない劣等感にずっと苦しみました。小・中学時代は音楽の時間がつらかった。恥ずかしくて情けなく、落ちこみ、コンプレックスがどんどん膨らみました。高

校になって音楽が必修でなくなったのに、社会人になると「天敵」のカラオケが流行りだした。当時は仕事の接待といえばカラオケです。会社の上司から、歌わないのは取引先に失礼だぞと何度も叱られる。まだ個室なんてない時代です。しかたなく小さな声で歌うと、店内の関係ないグループの客まで口をあんどり開けて見ている。もう針のムシ口でした。

その日の夜、考えました。音譜通りに歌わなければいけないと思いこんでいるけれど、自分が歌いたいように心をこめて精一杯大きな声で歌えばいいのではないかと。それで開き直って、次の機会に当時流行っていた「勝手にしやがれ」を歌った。劣等感ゆえに心の床に引いていたラインから一歩踏み出したのです。そうしたら「お前にしか歌えない」と大いにうけて、お義理ではない拍手が知らない人からも湧き起こったのです。以来、マイクをもつことが大好きになりました。

恥ずかしい体験をすると、人はコン

プレックスを膨らませてしまう。他人はすぐに忘れてしまうのに、自分の中ではずっと引きずっている。でも、それをさらけだしてしまえば、コンプレックスなんて無意味だとわかります。すると劣等感が強みに変わる。傷つきたくなくて、引いたラインを越えて挑戦すれば楽になり、新しい世界が開けます。

「今からでは遅い」と、挑戦をためらう人がいます。社会人になって十年、二十年とやってくれば、誰でも仕事や人生についていろいろ悩みます。ただ、イチからやり直す踏ん切りがつかない。それまでやってきたことが全部否定されてしまうと感じるからです。でも、やり直すということは、今までの歳月をすべて否定することではありません。

たとえば五十歳になってやり直すのは、二十歳に戻るわけではない。それまでの二十年、三十年が必ず力になって、再出発するのです。むしろ報われなかったり挫折が多いほど、新しい挑戦の基礎がしっかり築かれています。です。いくつになっても、遅すぎることはない。今からでも遅くはない。



逆境のときこそ踏みとどまる

ただし、やみくもに前に進めばよいということではありません。踏みとどまる勇氣、決断も必要です。ぼくは社会に出てから人間関係に疲れるとすぐに会社を辞めていました。職場の人は何とも思っていないのに、他人との間に自分で壁をつくり、職場が嫌になっ転職したことが何度もあります。これでは、どこへ行っても同じです。おれはダメな人間だなと自分を卑下することになる。だから、そのような転職はしないほうがいい。今いる職場で得るものを得て、やりきったと思えるまでは、耐えたほうがいい。

これは転職に限りません。今は耐え忍ぶとき、と自制する判断も大事です。逆境のときは、あがかずに自制して力を蓄え、スタンバイ状態にしておく。そうすれば、好機のとくにすかさず前に踏み出せるものです。自制こそ、新しく挑戦する機会をたくり寄せます。踏みとどまる決断、勇氣も必要。焦ることはありません。

生き方を年齢というものさしだけで

決めるのはよくありません。周囲をみて、自分はもう五十か、六十かと考えて意識を縮こまらせたなら、自分がどんなしぼんでしまう。年齢なんて関係ない。周りがどうかではなく、自分はどうなのかを考えたほうがいい。

「今が出发点」これがずっとぼくの座右の銘です。いつも今が新しい出发点。今からでは遅すぎる、と思いついたら何も始まらない。遅いと気づいたときを出发点にすれば、新しい方策が必ずみつかります。失敗しても「今が出发点」と呟けば、落胆せずに新しい挑戦に踏み出せます。〈終わり〉

※月刊誌『PHP』2013年3月号より
取材・文 豊田 素行
※文中の情報は当時のものです。

作家

志茂田 景樹さん

1940年、静岡県生まれ。中央大学法学部を卒業後、さまざまな職を経て作家を志す。1980年に『黄色い牙』で直木賞を受賞。近著に『人って、みな最初は石ころだもの』（ポプラ社）等がある。「よい子に読み聞かせ隊」を結成。以後、テレビタレント活動、小説執筆をセーブし、自ら全国各地で読み聞かせ行脚を行い、講演は1800回に近づいている。童話・絵本執筆も手がけている。

